

アジアの農村における“開発” の導入と農民の対応－地域発展 の固有論理を求めて

1. 研究組織

研究代表者：足立 明（北海道大学文学部・助教授）

研究分担者：福井 清一（九州大学農学部・助教授）

野間 晴雄（奈良女子大学文学部・助教授）

富山 一郎（神戸市外国語大学外国語学部・助教授）

宇佐見晃一（京都大学農学部・講師）

2. 研究のねらい・目的

これまでの“開発”に関わる研究は、“開発”という概念を、大なり小なり客観的に規定され、実証的に把握できるものとして用いてきた。事実、本研究組織のメンバーも、そのような立場でアジアの農村研究を実施してきたのである。しかし我々はこれまでの調査経験の中で、“開発”をそのような実体概念としてのみ捉えることに不満を感じてきた。つまり、これまで我々が蓄積してきた“開発”過程の経験的・実体的分析に加えて、“開発”というものを西欧社会をモデルとして歴史的に（権力・知のアンサンブルの中で）構成された強力な言説の束（または世界の見方）として捉え、それが農村部へ浸透し、農民を“開発”実践する主体となす過程として分析する必要性を感じてきたのである。

そこで本研究は、上記のような複合的視点からアジア農村の分析を行い、より立体的な視点で農村の発展・変容過程の記述を試みようとした。具体的には、研究代表者と分担者がこれまで研究してきた南アジア（スリランカ、バングラデシュ）、東南アジア（タイ、フィリピン）、東アジア（日本）の農村を対象に、(1)農村に対する外部からの“開発”概念の導入・定着の過程（“開発”の実定化過程）を分析し、その際、西欧的な“開発”の言説が、当該社会の固有な条件（宗教的世界観、教育における進歩観、ナショナリズム、社会階層、政治経済状況など）の下で、どのように具体的な“開発”や“発展”のイメージとして生みだされてくるのかを問おうとした。さらに、(2)そのような“開発”概念の導入に対する農民の様々な（積極的・消極的・否定的）対応を、“開発”に関する語り（開発儀礼、開発キャンペーン）や具体的な実践（共同労働、土地改革、農協組織、出稼ぎなど）において分析しようとした。そして、(3)これまで我々が蓄積してきた実体的・経験的な“開発”過程の資料と突き合わせ、より立体的な農村変容の分析・記述を目指したのである。そして、これらの作業を通じて、アジアの農村における村落レベルでの「発展の固有論理」を模索することができると考えたのである。

3. 平成5年度の研究経過

上でも述べたように、本研究の目的は、アジアの農村での開発導入過程を総合的に分析するための枠組の模索であった。特に、開発というものを西欧社会をモデルとして構成されてきた言説として捉える視角（以下、視角A）と、そのようにして構成された開発概念を何らかの形で前提とした上で、実体的な開発導入過程の分析という視角（以下、視角B）の統合を模索してきた。そのため、この1年間で4回の研究会を行ない、研究班員の発表に加え、各分野からゲストを招き、広い知見を得た。研究会の実施経過は以下のとおりである。

第1回研究会（京都府美山町にて、平成5年7月28日～29日）

研究班員（全員） 「各自のアジア農村研究の総括」

第2回研究会（札幌にて、平成5年9月6日～7日）

足立 明（北大） 「開発と文化人類学」

池田 光穂（東日本学園大） 「医療援助と文化人類学」

福井 清一（九大） 「誘発的技術進歩仮説をめぐって」

宇佐見晃一（京大） 「バングラデシュ農村開発の現場から」

野間 晴雄（奈良女大） 「バングラデシュ農村開発の歴史地理的側面」

第3回研究会（博多にて、平成5年12月22日～23日、原班、清水班と合同）

富山 一郎（神戸市外大） 「ミクロネシアの『日本人』——ナショナル・アイデンティティの非決定性」

内堀 基光（一橋大） 「国民・文化の大枠・中枠・小枠：マレーシア連邦サラワク州イバン社会」

原 洋之介（東大） 「地域研究への疎遠性を内在化する経済学小世界」

第4回研究会（東京にて、平成6年2月22日～23日）

河合 明宣（放送大学） 「バングラデシュ開発史」

永野 善子（神奈川大学） 「フィリピン・砂糖キビ作地帯の協同組合経営——土地移転と農園労働者の自立過程」

高間 英俊（JICA, 沖縄国際センター） 「日本の援助と援助機関」

喜多村百合（九州大学） 「国際開発をめぐるジェンダーの諸問題——WID, WADそしてGAD」

次に、これらの研究会での発表内容と議論のポイントを、視角Aと視角Bに分けて簡単に示してみたい。もっとも、個々の研究発表は必然的に両方の視角を含んでおり、明確に分けるこ

とは困難だが、便宜上どちらかに分けて述べてみたい。

まず視角Aに関しては、スリランカやタイにおける開発儀礼やキャンペーンの分析を通じて、開発イデオロギーの流布過程が明らかにされた（足立）。また、日本の南方関与の分析を通じて、南方島民の位置づけに関する「文化的」語りと「実践的」語りの二重性によるイメージ形成が明らかにされた（富山）。そして、この枠組みが日本によるアジアの農村開発という関与を通じた「低開発」の発明を理解する新たな枠組みを提示しているということが議論された。さらに、中米・南米での医療援助の経験から、開発イデオロギーと合衆国の軍事的・政治的な関係が示された（池田）。アメリカを中心とした開発と女性に関する言説に関しては、“women in development”から“gender in development”への関心の移行が詳細に紹介された（喜多村）。

視角Bに関しては、技術的進歩に関連した人間の主体的誘引についての理論的仮説（「誘発的技術進歩仮説」）を、日本、フィリピンなどの具体的な資料を通して検討し、その限界と新たな展望が議論された（福井）。また、バングラデシュ農村を対象として、歴史学的、社会学的な分析から、開発導入における「官」と「農民」の間のギャップが示され、それについての今後の展望が示された（野間、宇佐見、河合）。さらに、フィリピン・ネグロス島の地主と農民による協同組合経営の綿密な分析によって、特異な条件のもとであるが、一定程度成功をおさめた協同組合の希有な事例が示された。開発立案の立場からは、JICAの援助体系が述べられ、開発側の実際的手続きが明らかになった（高間）。特に、開発側の実際的手続きの最近の傾向として、「参加型」のプロジェクト・サイクル・マネジメント（PCM）の手法が紹介され、開発推進側の「合理的」かつ「体系的」な開発言説の醸成手段として注目を浴びた。

また、これらの視角Aと視角Bを包含しつつ、より大きな視野からの分析も示された。それは市場というものを普遍概念として用いるのではなく、商人と市場の地域的特性に着目し、様々な経済発展の地域性を明らかにしようとするものであった（原）。ここで示された視座は、本研究が目的とする視角Aと視角Bの統合を試みる際の、重要な基盤を与えるもので、今後、地域的な「発展」の固有性を見いだすための展望を与えるものであろう。

4. 研究の成果とフロンティア

本研究の成果とフロンティアを示すために、視角Aの深化、視角Bの深化、そして両者の統合といった三点に関して述べてみたい。

まず視角Aに関しては、他者認識の問題が開発言説の問題の根底にあることが明確になった。

さらに、他者認識というものは、当初強調していた西欧によるオリエンタリズム的な認識のみならず、それと微妙にずれる援助国日本特有のアジア認識も、アジアの開発を考える上で重要な分析対象であることが明確になってきた。そのため他者認識の二つのコンテキスト（富山）を発展させ、日本文化の「ルーツ」としてのアジア（または特定社会・文化）の文化的語りや、日本人の「能力」との比較を通じた実践的なレベルのアジアの語りといったものを媒介に、日本のアジア像を考察し、そのうえで当該社会での開発援助にまつわる開発言説を理解して行くことが必要となろう。そして、このような考察は、開発言説のより広い比較の枠組みを提供するであろう。

しかし、他者認識と開発言説の問題は、上で述べた戦後の開発過程のみに関わるわけではない。植民統治下のアジア諸国において、宗主国のアジア認識と統治政策、進歩・発展・豊かさ・貧困などに関する言説、農民の自己認識、農民の対応といった点は、戦後の開発言説との比較で重要な分析対象となる。この点は、バングラデシュの19世紀からの開発史の議論（野間、宇佐見、河合）から明確になってきたものである。特に、バングラデシュの農民がいつごろから自らを（近代化論的な意味で）貧しいと思うようになってきたのか、そしてその過程はどのようなものであったのか、という問いはきわめて興味深い今後の課題である。

さらに、開発立案者の技術革新であるPCMの存在を知ったのは、貴重な成果である。当初考えていた開発言説の流布過程は、広範囲にわたる開発キャンペーンや儀礼、それに村落レベルの開発担当官らの語りを考えていたが、このPCMは、役人や技術者のみならず、農民なども参加して開発のターゲットや進め方を検討し、お互いの合意形成を行なおうとするもので、まさしく開発の微視的なレベルでの実定化過程を演出するものである。この意味で、PCMの実践を参与観察する事で、開発の実体的過程と開発言説の複雑なからみあいを実証的に分析できるであろう。今後の開発研究の興味深い対象を見いだしたといえる。

また視角Bに関しては、前節で要約したように、開発過程の理論的分析や興味深い事例分析を通して色々な知見を得ることができた。特に、「誘発的技術進歩仮説」の検討において、生態的、社会的、歴史的な諸条件のもとでの不備が示されたが、それにも関わらず、農業発展を人間の合理的行動の結果として説明する普遍的論理の追究という立場（福井）は、視角Aにおける解釈学的立場との対比が明確になり、両者の生産的な橋渡しの端緒がつかめた。

とは言うものの、今年度の研究会の全体を通じては、開発言説の分析と実体的な開発過程分析という二つの視角の間のせめぎ合いや統合が、必ずしも活発に行なわれたとは言えない。それらは、しばしば両者の併置というかたちに関わったように思われる。というのも、議論の中

で両視角間の認識論的、倫理的前提がなかなか言語化せず、両者の統合が困難となったからである。

しかし、それにも関わらず、この二つの視角の統合という事に関して、一つ有益な展望を得ることができた。それは、前節で言及した経済発展の地域性を分析した「枠組み」（原）が、両視角を統合し、より広い視野から開発過程を分析・記述する大枠となり得るかも知れないという期待である。というのも、この「枠組み」は、商人と市場の分析にもとづいたものであり、商人と市場は必然的に開発過程に浸透しそれらを支えている。そのため、この「枠組み」は、本研究の対象にしている開発過程の重要な基盤の分析枠ともなり得るからである。特に、本研究は開発過程そのものに分析の重心を置いているため、商人や市場が本研究の「死角」になっており、この「枠組み」の上に統合を試みることは、より広い視野を獲得することにつながるだろうと思われるのである。

5. 今後の課題

今年度の科研による活動は終了したが、同じメンバーで来年度も申請しており、それが採択された場合、次のような課題を考えている。

- (1) 前節で述べたように、この研究班は、開発過程の分析の枠組みを模索するために二つの視角の統合を目指している。そのためには、共通の対象（例えば、緑の革命、土地改革、灌漑開発など）をめぐって全員で分析を行ない、相互の認識論的、理論的、倫理的ギャップの把握を行ない、共通の分析視角を模索する。さらに、そこで浮き上がってきた共通の視角を、前節で述べた経済発展の地域的固有性の「枠組み」の中で位置づける試みをする。
- (2) 上記の課題と並行して、前節で示した各自の研究課題（例えば、「貧困」観の歴史分析、PCMの分析など）をより一層検討していく。
- (3) この研究会と並行して、この研究会で深化した枠組みをもって、新たな資料収集のために海外調査を計画し、申請する。というのも、今年度の研究で有効な手持ちの資料や経験（特に、農民の開発に対する意識や対応について）の不足を痛感したからで、このメンバーを含む、広い領域からの研究者による共同研究の申請を行なう。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

足立 明

「開発の語りと農民」『総合的地域研究』No. 3 : 18-20, 1993.

福井清一

「農家家計員の就業選択」『季刊理論経済学』44(2): 159-168, 1993.

「環境保全の視点から新政策を見る」『農業と経済 別冊』8: 205-211, 1993.

“An Economic Analysis of Rural Informal Credit Market with Reciprocity.” *Jour. of Faculty of Agr., Kyusyu Univ.*, 38(1・2): 35-46, 1993.

「農村活性化と環境保全」西村博行ら編『農村の環境保全——英国の経験に学ぶ』富民協会, pp. 98-109, 1993.

『アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書——ベトナム国』アジア人口開発協会 (APDA), 1993.

「伝統的経済システムの理解をめざして」『総合的地域研究』№3: 15-17, 1993.

野間晴雄

「エコヒストリーとしてのベンガルデルタ——開発・農民・村落」(総合地誌研究叢書), 広島大学総合地誌研究資料センター, 1993. (ページ未定)

「水没の恐怖の中で、バングラデシュ」坂口慶治・植村義博・須原洋次編『アジアの何を見るか』古今書院, pp. 173-181, 1993.

富山一郎

「ミクロネシアの『日本人』」『歴史評論』513: 54-65, 1993.